シーワールドのアニマル達

●5年目をむかえたシャチのカレン

「海のギャング」「クジラ殺し」と呼ばれ恐れられているシャチは、オスの背ビレが体長の1／3にも大きくなり、昔の武器の「ほこ」を逆にしたように見えることから「サカマタ」とも呼ばれています。

シーワールドの看板スター「カレン」はメスのシャチで、昭和55年2月にオスの「キング」と共にアイスランドからやって来ました。当時カレンは、体長3.6m、体重915kgでしたが、5年たった現在では、体長4.8m、体重1,600kgとなり、年齢も9才になりました。

シーワールドにやって来てからのカレンは5年の間にいろいろな事に出あいました。昭和58年10月には、良きパートナーのキングが死亡したため寂しさのあまりノイローゼになるのではと、係員達も心配しましたが、同居中のバンドウイルカ達と仲良しになり、係員をホッとさせました。また、昭和59年2月の天皇陛下の行幸啓、同年10月の常陸宮同妃両殿下のお成りの際にはイルカ達をリードして無事にショーの大役を果たし、海の王者にはじない活躍ぶりをしめしてくれました。

現在では、30種目以上の演技を覚え、白と黒の美しいツートンカラーの巨体を使ってダイナミックな演技をおこなってくれていますが、今年の正月にはファンのお客様からカレン宛の年賀状も届けられるようになりました。　（岡田）

▲サカマタ（シャチ） *Orcinus orca*

●“海の忍者”マダコ

マダコは本州中部以南の岩礁の多い海域に住んでいます。夜行性で、エビ、カニ、魚などを食べていますが、特にカニと二枚貝が大好物です。一般にタコの頭といわれている部分は、実際は胴で、口のように見えるのは呼吸や排泄のための器官です。本当の口は8本腕の付け根にあり、カラストンビとよばれるくちばしがあります。

このマダコには大変すばらしい超能力があり、係員がしばしば悩まされます。水槽からタコが抜け出さないようにふたをし、さらにコンクリートのブロックを何個も乗せたのにもかかわらず、翌朝水槽を見るとからっぽということがしばしばあります。タコにはくちばし以外にかたい部分がないため、体の形を自由に変え、たった2㎝ほどのすき間でも通り抜けることができるのです。

このようなマダコの超能力を見ていただこうと考え、巣穴に使っていた素焼のタコツボを透明のツボに加工し、出入口を細くして、細いすき間でも出入りできることを観察できるようにし、展示を開始しました。

タコの超能力にはこの他にも腕に2列に並んだ強力な吸ばんで、自分の体重の20倍近い物を動かすことや、一瞬に体色を変え、体にいぼやしわを作って背景にとけこんでしまい、敵の目をくらますことなどがあります。時々水槽の中の岩や石に変身し「しまった！脱走したか」と係員を驚かせることもあります。これからもマダコのいくつかの超能力を見ていただくために工夫をしていこうと考えていますので期待していて下さい。（小坂）

▲マダコ *Octopus vulgaris*

さかまた No.25　（禁無断転載）

編集・発行　鴨川シーワールド

〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709)2－2121

発行日　昭和60年7月

さかまた

鴨川シーワールド　NO.25

春の東京湾、生き物マップ

房総半島先端の洲崎から三浦半島城ヶ島を結ぶ線以北の海域を東京湾と呼んでいます。湾口の浦賀水道は東京湾の一番狭い所でここを境に北側では多摩川、荒川、江戸川、小櫃川などの河川が注ぎこみ水深は100 mよりも浅く、海底は厚い堆積物に覆われています。一方南側には水深700 mの深い大峡谷（東京海底谷）が入りこみ険しい地形となっています。東京湾と一口にいってもそこには河口の汽水域、干潟、砂浜、磯や深場など、その環境は非常に変化に富んでいます。そしてそこに住む生物は、それぞれの環境に応じた生活をしています。今回「春の東京湾、生き物マップ」というコーナーを設け、春の話題となった生物を干潟、磯、水深20m、200mと環境別に集めて展示しましたので、ここでは東京湾の生物のいくつかを紹介してみましょう。

▲東京湾の生物展示コーナー

春の大潮の干潮になると木更津付近の干潟は潮干狩の行楽客でにぎわいますが、ここではアサリのほかシオフキガイ、バカガイ、マテガイなども見られます。これらの二枚貝は砂の中にもぐり、水管を出して呼吸したり餌をとったりしています。干潟には凹凸が少ないため、そこに住む生物のほとんどが鳥などの外敵から身を守るために砂の中で生活しているのです。

海の中では冬から春にかけて海藻が繁ります。この頃千葉県富山町では、養殖コンブが育ち始めます。コンブは東北地方以北の沿岸に産し、特に北海道が有名ですが、4月になると養殖された東京湾産コンブは3mに成長し、出荷されます。

3月になるとスミイカという名で親しまれているコウイカが水温の暖かい浦賀水道の海底で冬を過ごしたあと、岸辺に近づいて海藻などに卵を産みつけます。卵を産んだ親イカは一年という短かい生涯を終えますが、産みつけられた卵からは約40日後、わずか5㎜という小さなコウイカの子供達が次々と泳ぎ出してきます。

▲コウイカの産卵 *Sepia esculenta*

浦賀水道に近い千葉県富浦町沖、水深200 m付近では冬から春にかけてヒラメの底刺網漁が行なわれますが、この網にオキナエビスという巻貝がかかることがあります。オキナエビスの仲間は、3億年もの昔に繁栄した巻貝で、生きた化石として知られ、現存する巻貝の内、最も原始的な特徴を残している種類です。採集数が少なく、飼育も難しいため、この貝の生態はほとんどわかっていませんが、昨年に引き続きこの貝の飼育観察を試みていたところ昭和60年4月13日の夜、展示水槽でオキナエビスが産卵するのを確認しました。オキナエビスの産卵を観察したのは世界でも初めてのことです。この卵は5日後に孵化し、トロコフォアと呼ばれる幼生まで発育しましたが、残念なことに全滅してしまいました。

▲オキナエビスの産卵 *Mikadotrochus beyrichi*

世界的な大都市である東京のすぐひざもとの東京湾に私達の食卓に上るなじみの深い生物や、生きている化石と呼ばれるものまでたくさんの生物が住んでいることは、とても素敵なことだと思います。

（津崎順）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

イルカ、スターへの道 パートII

野生のイルカが水族館に運ばれ、訓練を受けて一人前のスターになるまでの経過は、前回「さかまた№21」で簡単にご紹介しましたが、今回は、水族館に来てからの基本的な訓練「しつけ」について、少し詳しくご紹介してみることとしました。

▲スキンシップは、イルカとの付き合いでも大切です。

「しつけ」は、人間側が決めたイルカとの約束ごとのことで、正しい生活習慣とでも言えるものです。人に飼われ、人の与える餌を食べ、飼育プールの大きさや環境に馴れた頃から、この基本的な「しつけ」が始まります。「しつけ」が十分にできないと、高度な訓練をおこなっても、良い芸ができません。この時期は、イルカと人間が共通の目的に向って一緒に仕事をする、初めての大切な時期でもあり、十分時間をかけてイルカから何かを学ぶような気持ちで付合う必要があります。

▲仲良く並んで指名を待つイルカ

「しつけ」の第1歩は手元からの給餌です。これは、人の居る所に寄って来て手元から餌を食べるようになることです。簡単そうですが、イルカにとってプールの壁に寄ってくることは泳ぎ方のコントロールがむずかしく、また、壁面や人に対し警戒しなければならないため、なかなか大変なようです。「しつけ」の第2は、自分の席を憶えることです。これは、各々のイルカが決められた一定の位置に着くことです。席が決まらないと落ちつかなかったり、ケンカをしたりして訓練がおもうように進まないのです。イルカの位置が決まったら、次は立泳ぎをして水面に顔を出すことです。イルカは初めから水上に顔を出して立泳ぎができるわけではありません。これは手元から給餌をして、イルカの吻端に手や目標物をふれ、水面上に顔を出させて立泳ぎをするようにしむける訓練です。これが今後の全ての訓練の基礎となる「気をつけ」の姿勢です。この状態で決められた位置に待機していることも「しつけ」の一つです。合図を出す前にイルカが勝手に席を離れてしまっては困るので、この「しつけ」も大切です。

▲A地点からB地点へ自由にイルカを移動させる誘導訓練

この様な「しつけ」に加え、特定のイルカに演技をさせる前に出すいわば指名する合図を教えることも必要です。また、イルカを一定の場所から別の場所に自由に移動させる誘導のための「しつけ」もあります。この時、呼ぶ側のトレーナーは、特定の音の出る道具でプール壁を打って音を出して呼ぶようにします。

この様な「しつけ」ができた後、一つ一つの種目の本格的な訓練に入って行きます。　（清水）

表紙説明──「東京湾でとれたオキナエビス」

（和名）オキナエビス
（英名）Slit shell
（学名）*Mikadotrochus beyrichi*

三億年前の姿を残す「生きた化石」として知られているオキナエビスは、原始的な巻貝の特徴の一つとされているスリット（slit、切れ込み）がある美しい巻貝です。

当館では、昨年につづき東京湾でとれたオキナエビスを飼育し展示しています。飼育がむずかしいため生きている姿を見ることができるのは珍しいことです。　（金銅）

トピックス

動物交換としてオキゴンドウ、アメリカのシーワールドへ!!

▲鴨川のプールともお別れ。プールの水を抜いて担架に乗せられ旅支度中のオキゴンドウ。

アメリカのカリフォルニア州にあるサンディエゴシーワールドと当館との間で動物交換が、2月24日無事終了しました。

昨年10月4日に、キタゾウアザラシ2頭とカリフォルニアアシカ2頭が、サンディエゴシーワールドから当館にやって来ましたが、そのお返しに当館からは、オキゴンドウ2頭とタカアシガニ2匹を2月24日にサンディエゴに送りました。

輸送に先立ち、サンディエゴシーワールドのコーネル副社長夫妻およびスタッフと、当館の水族館長以下のスタッフ一同とのあいだで、日米親善の交流がはかられた後、プールからの運び出しや、輸送コンテナへの収容などの共同作業が、言葉が十分通じない中ではじめられましたが、そこは慣れた専門スタッフ同士、作業は順調に運びました。

▲輸送用のコンテナに積込まれるオキゴンドウ。鴨川・サンディエゴ両シーワールドのスタッフの共同作業の息もピッタリ。

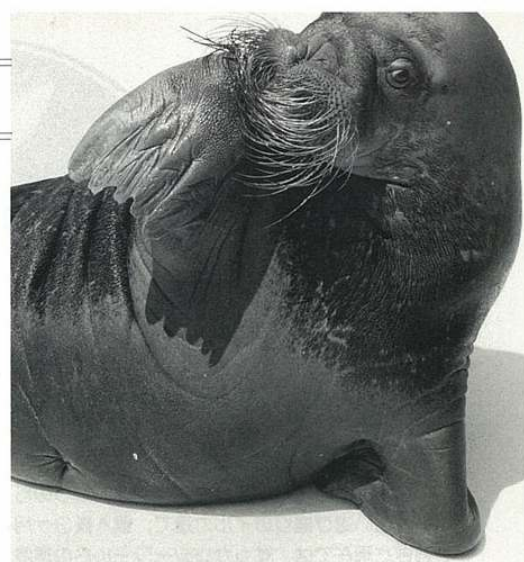
鴨川から成田の新東京国際空港へ陸路トラックで運ばれた2頭のオキゴンドウは、飛行機に積込まれた後、サンディエゴシーワールドへ向って旅立っていきました。その後の連絡では、無事このオキゴンドウ達は、サンディエゴに到着したとのことで、環境に馴れた後には、トレーニングを行ない、ショーに出場させるとのことでした。日本からの代表として、是非がんばってもらいたいものです。　(毛利)

◀輸送トラックに積込まれ、一路成田からアメリカへ向うオキゴンドウ。

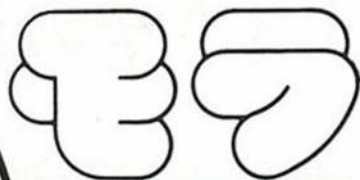
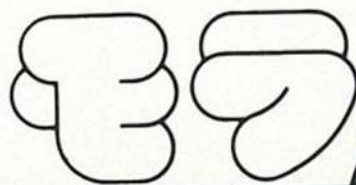
セイウチのショー出場

当館のセイウチ、「タック」と「ムック」は、来館後1年半たった今では、もうすっかり環境にも馴れ、体重も当初の2倍になりました。そして今年のお正月からは、アシカショーの脇役として参加するまでになりました。

セイウチ独特のユーモラスな姿としぐさをより多くのお客様に見ていただけるよう、特訓を重ねたかいがあり、アシカの「ザ・コミカルズ」チームが演じている「一寸法師」の寸劇中の都の人々役として登場し、今や主役のアシカ君達顔まけの人気で、お客様に「投げキッス」や「水鉄砲」、顔を前肢でかくして寝ころぶ名演技の「てれちゃうな」など、現在6種類ほどの芸をお見せしています。

世界でもめずらしい、このセイウチ君のショーをどうぞお見のがしのないように!!　(荒井)

▲しなを作って独特のムードでせまるメスの「ムック」。このあとお客様への投げキッスが大うけです。

▲得意な「水鉄砲」の威力で火を消す？オスの「タック」。

前肢で顔をかくし、ごろんと寝ころび「てれちゃうなァ」の大熱演▶オスの「タック」。

●新入イルカ万才

和歌山県大地から2月に、東伊豆富戸から3月に6頭のバンドウイルカが、シーワールドの仲間として加わりました。伊豆半島からのイルカ搬入は7年ぶりのことで、そのうちの1頭は、体長2m92cmの成熟した雄で、現在飼育されている雌イルカのために婿入りしてきたものです。残りの5頭は、若い遊び盛りのイルカ達で、搬入後3ヶ月を過ぎた現在では、すっかりシーワールドの環境や係員にも馴れ、毎日、トレーナーから初期訓練を受けています。訓練の合い間には、仲間同志で活発に追いかけっこやジャンプをしたり、プールサイドに来た見物客にも愛嬌をふりまいたりするなど、未来のスターとして、たのもしいところを見せています。これからの新入イルカ達の活躍を温かく見守ってあげて下さい。

（桐畑）

●新ショー公開

3月24日から、シーワールドの海獣ショーの内容が新しく変りましたので、ご紹介してみましょう。

シャチ・イルカショーは、「ダイナミックチャレンジ」と題して、能力の限界を見ていただけるような内容となっています。新たに加わった小さなカマイルカ達のスピーディーな活躍も見どころの一つです。一方、アシカショーは、「一休さん」から「一寸法師」に変わり、セイウチも登場し愛嬌をふりまくなど、笑いの場面が数多くもりこまれています。また、マリンシアターのベルーガによる水中ショーは、「ダイビングコンパニオンパートII」として、新たな種目も加わり、「海の友」としてのイルカ達のすばらしさをご覧いただけるようになっています。

（平塚）

●モニターテレビで機械室を紹介

当館では、テレビモニターを使用して水族館地下機械室の紹介を行なっています。この試みは、一般の入場客にはあまり知られていない水族館の裏方を紹介し、多少でも「水族館のしくみ」に興味をもっていただくために始めた試みです。展示生物の生息環境を周年維持するための冷暖房機器や、水族館内を快適に見学していただくための空気調和設備など、きっと初めてご覧いただくものばかりだと思います。また、テレビカメラは広さ350㎡の機械室を320度の範囲で自動反転し、機械室の模様を映していますが、それでも紹介できない部分が沢山あります。もっと詳しく知りたい方には、機械室の案内もおこなっていますので、ご希望の方は窓口へお申し込み下さい。

（君塚）

●新装した、長寿の池

ウミガメは世界で7種類知られており、房総半島には主にアカウミガメとアオウミガメが回遊してきます。そして5～7月頃には鴨川シーワールド前の砂浜でもアカウミガメの産卵を見ることができます。

当館では、アカウミガメとアオウミガメの2種類をウミガメプールで展示していますが、カメは昔から長寿の代名詞としてよく知られているところから、このウミガメプールは長寿の池としてお客様から親しまれてきました。しかし、このウミガメのプールも15年の年月がたったため春休み前に大改修を行ないタイル張りの広くて明るいプールに変身しました。皆様ものんびりと泳ぐウミガメの長寿にあやかってみてはいかがですか。

（高橋幸）